

木簡研窗

第九号

木簡研磨

第九号



木  
簡  
学  
会

題字  
藤枝  
冕刻

目 次

卷頭言

一九八六年出土の木簡

目次

田中 稔……

概要	凡例	綾村 宏	京都・長岡京跡(3)	京都・長岡京跡(4)	岩崎 広誠
奈良・平城宮・京跡			京都・平安京右京三条一坊八町	京都・平安京右京五条一坊三町	木下保明
奈良・興福寺旧境内			京都・平安京右京八条二坊六町	京都・平安京右京八条二坊二町	久世康博
奈良・藤原京跡			京都・平安京右京八条二坊十二町	京都・伏見城跡	久世康博
奈良・和田廢寺		寺崎保広	大阪・大坂城跡	大阪・安堂遺跡	久世康博
奈良・橿寺		中井一夫・和田萃	大阪・津田トバナ遺跡	中阪・萱振A遺跡	宇治田幸治
奈良・曲川遺跡		加藤優	中阪・津田トバナ遺跡	中阪・萱振A遺跡	桑野泰治
京都・長岡京跡(1)		加藤優	中阪・津田トバナ遺跡	中阪・萱振A遺跡	中阪・萱振A遺跡
京都・長岡京跡(2)	辻本和美	坂口俊幸	中阪・津田トバナ遺跡	中阪・萱振A遺跡	中阪・萱振A遺跡
	38 39	29	27	26	21 18 8 5 1

兵庫・弥布ヶ森遺跡	加賀見省一	岩手・胆沢城跡	佐久間賢
兵庫・但馬國府推定地	吉織雅仁・甲斐昭光	青森・根城跡	佐々木浩一
兵庫・初田館跡	岡崎正雄	山形・生石2遺跡	安部実
兵庫・福田片岡遺跡	梅本博志	秋田・払田柵跡	船木義勝
愛知・清洲城下町遺跡(1)	高橋信明	福井・曾万布遺跡	田辺常博
愛知・清洲城下町遺跡(2)	永井義博	富山・辻遺跡	中司照世
静岡・居倉遺跡	羽二生保	島根・宮田川河床遺跡	北川美佐子
静岡・土橋遺跡	藤本強・宮崎勝美	広島・草戸千軒町遺跡	西尾克己
東京・駿府城三の丸跡	浜崎悟司	山口・周防國府跡	下津間康夫
東京・東京大学構内遺跡	金九誠	徳島・中島田遺跡	吉瀬勝康
千葉・浜野川遺跡	中井寛明	福岡・大宰府跡	酒本清司
滋賀・神照寺坊遺跡	徳岡克己	福岡・井相田C遺跡	倉住靖彦
滋賀・淨琳寺遺跡	山田謙吾	佐賀・吉野ヶ里遺跡	七田忠昭
滋賀・光相寺遺跡			
滋賀・吉地裏師堂遺跡			

一九七七年以前出土の木簡 (九)

奈良・平城宮跡 (第三三次補足調査)

寺崎保広

114

国語の表記史と森ノ内遺跡木簡

稻岡耕二

119

114

113 110 106 104 103 99 98 95 94 92 91 90 89 87

敦煌後胡黙址出土冊書の復原	大庭 篤
漆紙文書集成	佐藤宗諱・橋本義則
正倉院木筒の用途——原秀三郎氏の所説に接して	東野治之
岸俊男会長の思い出	平野邦雄
彙報	

## 凡例

- 一、以下の原稿は各木簡出土地の発掘機関に依頼して、執筆していただいたものであるが、体裁および積文の記載形式等については編集担当の責任において調整した。
- 一、原稿の配列はほぼ奈良時代の五段七道の順序に準じた。
- 一、積文の漢字はおおむね現行常用字体に改めたが、「實」「證」「龍」「廣」「盡」「應」等については正字体を使用し、異体字は「井」「井」「季」「鉢」等についてのみ使用した。
- 一、積文下段のアラビア数字は木簡の長さ・幅・厚さを示す(単位はミリメートル)。欠損している場合の法量は括弧つきで示した。その下の三桁の数字は型式番号を示す。またそれぞれの発掘機関での木簡の通し番号は最下段に示した。
- 一、訛文に加えた符号は次の通りである(六頁第一圖参照)。
- 「」木簡の上端ならびに下端が原形をとどめていることを示す。
- <木簡の上端・下端に切り込みのあることを示す。
- 抹消した文字であるが字画のあきらかな場合に限り原字の左傍に付した。

抹消により判読困難なもの。

欠損文字のうち字数の確認できるもの。

欠損文字のうち字数が推定できるもの。



前後に文字のつづくことが推定されるが、折損等により文字が失われているもの。

異筆、追筆。

合点。

木簡の表裏に文字のある場合、その区別を示す。

校訂に関する注で、原則として積文の右傍に付し、本文に置き換えるべき文字を含む場合。

編者が加えた注で疑問の残るもの。

文字に疑問はないが意味の通じ難いもの。

同一木簡と推定されるが折損等により直接つながらず、中間の文字が不明なもの。

組版の関係で一行のものを二行以上に組まなければならなかった場合、行末・行初につけたもの。

図版に写真の掲載されているもの。

- 一、地形図は原則として国土地理院発行の五万分の一地形図を使用し、図名を( )内に示した。地図中の▼は木簡の出土地点を示す。
- 一、積文の最下段に三桁で示した型式番号は、木簡の形態を示し、

つぎの「五型式からなる（七頁第2圖参照）。

011型式 短簡型。

015型式 短簡型で、側面に孔を穿ったもの。

019型式 一端が方頭で他端は折損・腐蝕で原形が失われたもの。

021型式 小形矩形のもの。

022型式 小形矩形の材の一端を圭頭にしたもの。

031型式 長方形の材の両端の左右に切り込みをいれたもの。方頭・圭頭など種々の作り方がある。

032型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいれたもの。

033型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいれ、他端を尖らせたものの。

039型式 長方形の材の一端の左右に切り込みがあるが、他端は折損あるいは腐蝕して不明のもの。

051型式 長方形の材の一端を尖らせたもの。

059型式 長方形の材の一端を尖らせたものであるが、他端は折損あるいは腐蝕して不明のもの。

061型式 用途の明瞭な木製品に墨書きのあるもの。

065型式 用途未詳の木製品に墨書きのあるもの。

081型式 折損、腐蝕その他によって原形の判明しないもの。

091型式 削肩。

広島・草戸千軒町遺跡出土木筒の型式番号は、広島県草戸千軒

町遺跡調査研究所『草戸千軒一木筒』を参照されたい。なおその他の中世木筒については以上の型式番号に適合しないものが多いで、注記を省略したものもある。

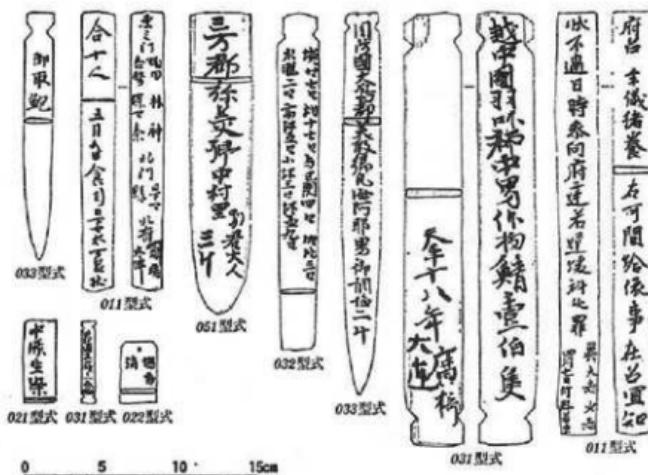
「行夜使仍北山越行  
×位下財原人安万呂  
行夜使仍注状故移」

「行夜使仍北山越行  
×位下財原人安万呂  
行夜使仍注状故移」

「泉進上材十二条中  
柏八条」

「武藏國男倉郡余戸里大賀坂一斗天平十八年十一月  
請飯  
請飯  
金人十人  
左作新四書如解  
史生一人  
舍人十七人  
右依例所請如件」

第1図 本筒釈文の表記法



第2図 木筒の形態分類

## 奈良・平城宮・京跡

1 所在地 奈良市佐紀町・北新町・三条大路一丁目・二条大

2 調査期間 路南一丁目、大和郡山市九条町  
平城宮内裏東方東大溝地区 一九八六年(昭61)三  
月～一月、同佐紀池南辺地区 一九八六年(昭61)三  
月、左京三条一坊一・八坪 一九八七年一月～二  
月、左京三条二坊三・四坪 一九八六年七月、左  
京三条二坊七坪 一九八六年九月～一九八七年四  
月、右京八条一坊十四坪 一九八六年一月～一  
二月

3 発掘機関 奈良國立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

4 調査担当者 司田 章

5 遺跡の種類 宮殿・官衙跡・都城跡

6 遺跡の年代 奈良時代～平安時代初期

7 遺跡及び木簡出土遺物の概要

一 内裏東方東大溝地区(第一七二次調査)

調査区は、内裏東外郭とその東方にある埴積基壇建物群からなる  
官衙(内裏東方官衙)と接まれた東大溝SD二七〇〇を中心とする  
地区である。検出した主な遺物は、掘立柱建物二棟、門一棟、築

地盤一条、掘立柱二条、溝一〇条などである。木簡は、東大溝  
SD二七〇〇、内裏東方官衙内から東大溝に注ぐ五条の暗渠、東西  
溝SD二三五〇とその南北にある溝状の堆積、掘立柱南北溝SA一  
二九〇七の柱穴から出土した。

SD二七〇〇は平城宮東半部を南流する基幹排水路である。これ  
まで、第一二九・一三九・二二・一五四次の各調査(北から順に)で  
検出しており、今回は二次と一五四次の間で約二〇mにわたって  
調査を行った。二次調査区以北では、両岸を玉石で護岸した石  
組溝であったが、今回の調査区では一五四次調査区と同様に、石組  
は東岸のみで西岸は素掘りのままであった。また何度も改修が行  
われたとの知見もえられた。SD二七〇〇の堆積層は大きく六層に  
分けられ、木簡はすべての層から計四三九六点(うち削削二七七六点)  
が出土した。最下層から養老七・神亀元年、底から二層目から天平  
ノ天平宝字年間、三・四層目からは天平勝宝・天平宝字年間の紀年  
銘木簡がそれぞれ出土した。また伴出した土器や軒瓦も既ね層序に  
従い平城宮出土遺物の編年に矛盾せず、SD二七〇〇は奈良時代を  
通じ順次埋没していくと考えられる。SD二七〇〇からは、木簡  
以外にも多量の遺物が出土した。木製品では、人形等の祭祀具、独  
楽・木球などの遊戯具、物差、藤織の八角椎状品、黒漆鏡の把頭等、  
金属製品では、皇朝錢、銅製人形、海老鏡、帶金具等、土器では、  
人面墨書土器やミニチュア土器等、瓦埴類では綠釉磚等が注目され

る。文字資料としては木簡以外に、「造宮内」「宮内省」「内舍人所」<sup>〔大字〕</sup>、「内舍人寮」「女官所」「太枕」「中衛」「衛口」「主典口」「序」「上番」「下番」「考」「考番」「桃皮膏」「神人」などの墨書のある土器、「足」「修」の刻印や「東」と鋸書きのある瓦、「鐵軍器口」と墨書する埠などがある。

SX一二七八七・一二七九一・一二七九八・一二八六三・一二九二は内裏東方官衙内から東大溝に注ぐ暗渠で、全部で木簡一三六点（うち削崩二三点）が出土した。SX一二七八七・一二七九二・一二七八三には改修の痕跡がある。SD一二五〇は内裏東方官衙内郭内の井戸SE七九〇〇から東大溝に注ぐ素掘りの東西溝で、一度の改修を受けている。木簡は三三点（うち削崩二点）が出土した。

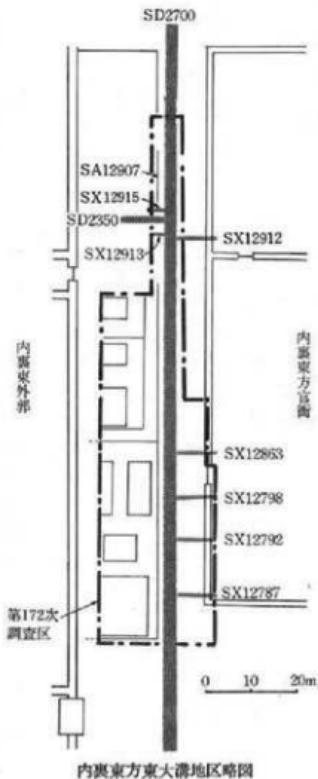
SX一二九一三・一二九一五は東大溝の西壁で検出した溝状の堆積で、木簡一〇点（うち削崩一点）が出土した。いずれも東大溝に注ぐ東西溝の出口の可能性があるが、詳細は不明である。

SA一二九〇七は東大溝の西岸沿いにある南北縫で、四間分を確認した。その柱穴から木簡二点が出土した。

二 佐紀池南辺地区（第一七七次調査）

本調査は平城宮西北辺にある佐紀池の南で実施された。検出した奈良時代の主な遺構は、掘立柱建物一棟、溝四条で、二次に及ぶ整地などの関係から四期に区分できる。木簡は、第一次整地土下の木屑・炭屑と東西溝SD一二九六五から出土した。

第一次整地土下の木屑・炭屑からは木簡一二七六点（うち削崩七点）が出土したが、同じ層から和銅と養老六年の紀年鉢木簡とともに、平城宮土器II（藍電・天平初年頃）の土器、平城宮出土軒瓦編年第一期（和銅・養老頃）の軒丸瓦・軒平瓦が出土し、これを覆う第一次整地土からは平城宮土器IIの土器、軒瓦編年第二期（養老末年・天平七年頃）の軒瓦が出土した。



SD一二九六五は調査区のほぼ中央で検出した素掘りの東西溝で、幅約一・六m、深さ約〇・五mを測る。この溝は第二次整地土の上から掘られている。木筒は三点が出土し、ほかに平城宮土器V(宝魚/延暦初年頃)の土器、軒瓦編年第四期(天平一七年/天平宝字頃)の軒瓦が出土しており、奈良時代末期まで存続したことがわかる。

### 三 左京三条一坊一・八坪(第一八〇次調査)

本調査は平城宮朱雀門跡の南東で実施された。検出した主な遺構は二条大路南側溝SD四〇〇六と朱雀大路東側溝SD九九一〇である。木筒は二条大路南側溝から出土した。

SD四〇〇六は素掘りの東西溝で、幅約三・三m、深さ約〇・四mを測る。溝内の堆積はおおむね上下二層に分かれ、伴出遺物は極めて少ない。木筒は上層から二点が出土した。

### 四 左京三条二坊三・四坪(第一七四一〇次調査)

調査区は四坪の西北部にある。奈良時代の主な遺構は、掘立柱建物七棟、掘立柱塀七条、井戸一基、三・四坪の坪境小路とその南北側溝等で、A・Dの四期に区分できる。木筒はB期の井戸SE三九三〇の埋土から一点が出土した。この井戸は井戸枠が抜き取られていて、埋土からは奈良時代中期から後半にかけての遺物が伴出している。

### 五 左京三条二坊七坪(第一七八次調査)

調査区は七坪の南半分を占め、特別史跡宮跡施設の北に接する。

奈良時代の主な遺構は、掘立柱建物五〇棟以上、掘立柱塀三九条以上、溝一〇条以上、井戸一四基、坪境道路一条、坊間路一条、坪内道路二条、旧河川數条などであり、それらは七期に区分できる。木筒は溝SD一四、掘立柱建物SB五五の柱抜取り穴、及び東一坊坊間路の西側溝SD一〇六から出土した。

SD一四是古墳時代より存続していた糞川水系の流路を奈良時代初期に幅を狭く造成し、中期に廃絶した、幅三・七m、深さ〇・四五mの蛇行する溝である。木筒はこの最上層から一点が出土した。SB五五は、南北に堀をもつ五間×二間の東西棟で、この東南隅の柱抜取り穴から木筒一点が出土した。SB五五は奈良時代中期に属する。SD一〇六は奈良時代を通じて機能していた南北溝で、幅三m、深さ一・二mある。堆積土は三層に分かれるが、木筒はその下層から合計一二点(うち削屑八点)が出土した。

### 六 右京八条一坊十四坪(第一七九次調査)

調査区は十四坪のほぼ中心部にある。奈良時代の主な遺構として掘立柱建物二四棟、掘立柱塀五条、溝四条、井戸三基等を検出した。遺構は大別してA・B二時期に区分できる。木筒はB期の井戸SE一八八〇の埋土から一点が出土した。この井戸の埋土からは平城宮と同様の軒平瓦が伴出している。なおこの井戸は金属製品の製作に使用されたと推定されている。

### 8 木筒の积文・内容

- (1) ×申請暇日事

(2) ×□□□□

(3) □人主 □□麻呂  
廣□  
〔源〕  
〔魚〕

(4) 右二人召雜 右二人侍從所

(5) 二日升三箇日御食不奉□□□

(6) 「僧房所」

(7) □ 食一升五合 中房預紀福足食。  
御垣本所編十二枚之□□科□  
三月十三日別當佐伯于□

(8) □ 九月□三日中衛□□□□  
〔源〕  
造東院所 請齋參□

(9) □ 『鶴方侶行』

(10) □ 『造五丈殿所詩合釘四隻各長七寸右為字相下衍固

(11) □ 物部廣公相替請丈部國勝

(12) 「右上官好申而令下甘輕」

(13) 九月一日□國中□成

(14) □□藏馬

(15) 九月九日領紀廣祐

(16) 料請如件」

(17) 139×22×4 111 \*

(18) 175×51×5 1011

(19) 255×(28)×3 981

(20) 255×(28)×4 1011

(21) 255×(28)×5 1011

(22) 255×(28)×6 1011

(23) 255×(28)×7 1011

(24) 255×(28)×8 1011

(25) 255×(28)×9 1011

(26) 255×(28)×10 1011

(27) 255×(28)×11 1011

(28) 255×(28)×12 1011

(29) 255×(28)×13 1011

(30) 255×(28)×14 1011

(31) 255×(28)×15 1011

(32) 255×(28)×16 1011

(33) 255×(28)×17 1011

(34) 255×(28)×18 1011

(35) 255×(28)×19 1011

(36) 255×(28)×20 1011

(37) 255×(28)×21 1011

(38) 255×(28)×22 1011

(39) 255×(28)×23 1011

(40) 255×(28)×24 1011

(41) 255×(28)×25 1011

(42) 255×(28)×26 1011

(43) 255×(28)×27 1011

(44) 255×(28)×28 1011

(45) 255×(28)×29 1011

09

造官省 合達□添□万呂」

時 縣大甘門

(82)×(20)×3 081

□□天平宝字三年卿從三位藤原□

西門川村 大石船守與昌

(223)×34×3 081

10

御贊納三斗 天平宝字六年十一月×

(96)×15×3 081

「口宣 (題額輪)

(52)×(15)×5 081

紙二百五十七張選文一百五張

「口宣

(96)×29×5 081

□□

091

「宿直 (題額輪)

(96)×29×5 081

×百冊八勝宝五年□□□日一百十三

夜：「百十一」

「口宣

(175)×15×2 019

×日大上天皇」

(196)×19×3 019

「口宣

(196)×28×3 033

〔十<sup>六</sup>〕

夜：「百十一」

「口宣

(196)×28×3 033

「錄主水司大膳

(170)×(65)×8 081

「口宣

(196)×28×3 033

北陸道□□」

(104)×15×3 011 \*

「口宣

(196)×28×3 033

〔<sup>(65)</sup>〕 造兵司矢作表方呂」

(175)×(17)×6 081 \*

「口宣

(196)×28×3 033

「内隔南方西門籍

(175)×(17)×6 081 \*

「口宣

(196)×28×3 033

・「北西門 他田宮成 大部□敷 錦×

(149)×16×4 019

「口宣

(196)×28×3 033 \*

08

□合四人

(149)×16×4 019

「口宣

(196)×28×3 033 \*

・「口宣

宇良媛部身万呂」

(280)×22×4 031 \*

- 「駿河国駿河郡子松郷津守部宮麻呂役施堅魚拾一斤拾兩  
天平宝字二年□當國司目從六位下息良真人大夫人」  
338×25×4 032
- 「安房国長狭郡置津郷戸主丈部黒秦戸口丈部第輸凡鮫陸斤  
專當國司目正八位下飾口朝臣大夫  
都司少額外正八位上丈部大足天平□□」  
(496)×18×5 051
- 「阿波国那賀郡武芸駅子戸主生部東方戸同部毛人調堅魚六斤天平七年十月△」  
287×22×6 031
- 「△上総国平群郡狹限郷□丁若麻績部麻呂養錢六百文」  
77×18×4 032
- 「△參河国芳因郡比莫鳴海部供奉九月料御費佐米六斤△」  
302×23×3 031 \*
- 「△參河国芳因郡海部供奉九月料□□×(215)×23×4 033
- 「△出雲国意宇郡飯梨郷中男作物海藻三  
龍重漆丙 天平勝宝七歳十月 斤△」  
159×27×5 031 \*
- 「△御野郡出石郷白米五斗」  
161×24×7 033 \*
- 「△天平勝宝八歲米五保倭文部東人」  
161×24×7 033 \*
- 「△備中國乾白魚陸斤△」  
133×29×7 031 \*
- 「△請請解讀解謹解申事解□奈尔波津尔」  
152×24×7 032 \*
- 「佐久夜己乃波奈〔布△〕」  
150×24×7 031 \*
- 「△上部字甘」  
117×21×3 032 \*
- 「△播磨国賀茂郡下賀□□□」  
221×21×6 033
- 「△民直農国庸米一俵」  
221×21×6 033

&lt;周防国佐波郡牛乳郷上村里戸辛人麻口二枚神龜三年十月&gt;

## 清状堆積SX-19-1

「阿波国那賀郡薩摩駅子戸鶴甘部口麻呂戸同部牛調堅魚六斤口平七×」

291×24×5 031

「因幡国巨瀬郡潮井郷河会里物部黒麻呂中男作物海藻六斤 天平七年七月」

368×23×3 031 \*

(6)の紀福足は延暦二年六月一日の「東大寺解」(平安通文)八一四二八九に正六位上行中監物として名前がみえる人物にあたり。この木簡はSD-1700の最上層からの出土であり、年代的にも矛盾しない。(8)と(9)は造営関係の木簡である。この他にも造営関係木簡が數点出土しており、(4)の天平宝字三年の年紀をもつ木簡と同一の層に集中する。天平宝字年間は『続日本紀』によれば、宮の改作が行われた時期であり、今回の一連の木簡もこれと関わる可能性が高い。

また、天平宝字三年の時点の造営郷の名前はこれまで知られていなかったが、(9)の木簡によつて、從三位の藤原氏であるから、藤原水手であることがわかる。(7)-(8)は門に關係する木簡である。今回の調査では、東大溝の西の内裏東外郭にある場所で多くの建物や廻を検出したが、これらの遺構が門の守衛に関わるものと考えることもできよう。貢荷札では切の木簡が注目される。これまで参河園驛豆(芳園)郷の鷹賀進荷札は折扇と横扇の二ヵ所の例のみ知られていたが、二つの島に挟まれた日間賀島(比奈島)からも

## 二 佐紀池南辺地区

## 木簡・鐵器

(1) 「伯耆国相見郡巨勢郷雜膳一斗五升養老口年十月」  
池南辺地区からも出土している(後掲)。(2)-(4)は専当官の記載がある荷札である。以前の出土例と合わせて、専当官の荷札は四点となつた。(4)-(5)-(6)には駆子の名前が記されているが、いずれもはじめて知られた駆子名である。

(1) 「伯耆国相見郡巨勢郷雜膳一斗五升養老口年十月」  
197×14×3 031 \*

(2) 「<sup>ノ</sup>若狭国遠敷郡<sup>遠敷里</sup>調塙一斗<sup>果</sup>」  
169×34×5 031 \*

(3) 「<sup>ノ</sup>讃岐国香川郡細郷生<sup>王</sup>得万白米五斗」  
165×23×5 031 \*

(4) 「丹比門十二月番下」  
・「麻呂」

(16) × 24 × 2 019

- (5) 「 河」  
 大部若麻呂 天剛ミツル  
 天剛ミツル   
 热アハ
- 大部若麻呂 天剛ミツル  
 天剛ミツル
- 「急アハシ如アハシ律リツ令ヨリ」  
 「」  
 「」(右側面)
- 〔左側面〕 120×76×18 011 \*
- (6) 125×23×3 031 \*
- 「 大林鹿アシカ」
- 〔7〕  供アヒ 御ミツル  系十キトス 約クニヤ  
 112×21×5 032 \*
- 〔8〕  染司在釜一  深一尺八寸  
 部造得末呂  作   老朱   
 足三在入六斗釜二  受  
 (121)×(55)×7 081
- 〔9〕 四 左京三条一坊三・四坪  
 井戸 S.E. 三九三〇  
 〔10〕  黒鰐六
- 〔11〕 140×20×3 032 \*
- 〔12〕 135×23×6 032
- 〔13〕 110×21×5 039 \*
- 〔14〕 「 美濃國麥門冬五升」  
 「 主水司布一端六尺」
- 〔15〕 「 南方帳十一 」
- 〔16〕 「 一  副」
- 〔17〕 東西溝 SD 二九六五
- 〔18〕 105×21×5 039
- 〔19〕 「 讀岐國香川郡細錦秦公」
- 〔20〕 〔今五  長五丈  太  〕  
 「 丈部伯麻呂 伯麻呂」  
 (106)×27×3 019

(5)は特異な記載を持つ呪符木簡である。出土した層から考えて、奈良時代の前半に遡ることになり、呪符木簡としては藤原宮跡第四七次出土のもの(本誌掲載)とともに最も古の部類に属する。

五 左京三条一坊七坪

第SD-1四

・「尾張國海部郡船里」

・「□連〔宋<sup>キ</sup>〕□□□□」

坊間路西側第SD-1〇六

(2) 「□□ 井□人等上日帳」

350×50×9 061

(3) 正宮四人 内藏一人

(156)×15×2 011

(4) 播磨國神前郡陰山郷□×

(162)×(183)×4 081

(5) ▽厨布直錢一貫

(123)×21×3 039

(6) ×年二月料御貲字波加六斤」

(120)×18×6 019

(2)は木箱の蓋に墨書きしたもの。(3)は上・下端が一次的に削られて  
いる。

六 右京八条一坊十四坪

井戸SE-1八八〇

(1) 「泰五 米一斗十一月十七日□」

164×23×5 051

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報一九八七』

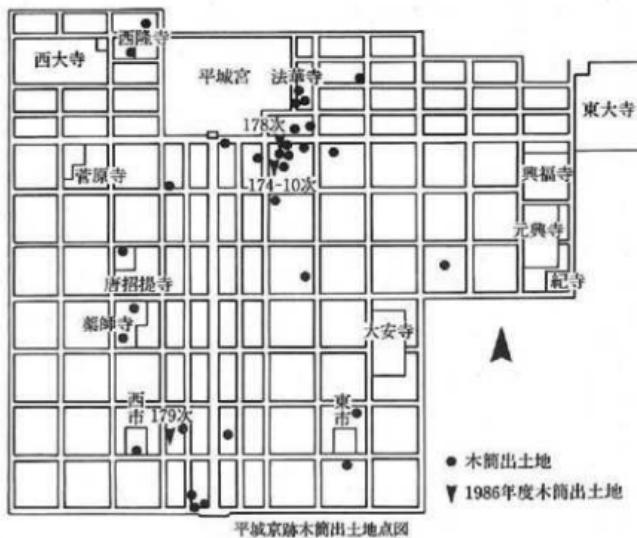
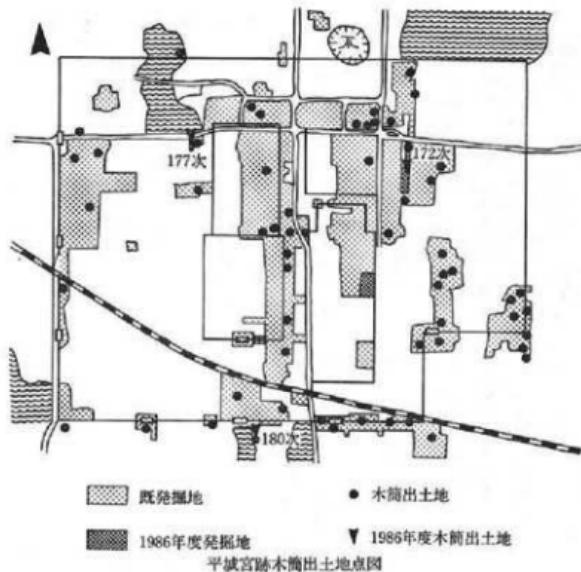
(一九八七年)

同『昭和61年度平城宮跡発掘調査部発掘調査報告』(一九八七年)

同『平城宮発掘調査出土木簡概報(六)』(一九八七年)

(寺崎保広)

1986年出土の木簡



## 奈良・藤原京跡

1	所在地	奈良県橿原市木之本町
2	調査期間	一九八五年（昭60）一二月～一九八六年八月
3	発掘機関	奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
4	調査担当者	岡田英男
5	遺跡の種類	宮殿・官衙・都城跡
6	遺跡の年代	七世紀末～八世紀初頭
7	遺跡及び木簡出土遺構の概要	
		香久山の西麓において一九八五年の第四五・四六次調査に統いて 第四七・五〇次（西）調査を行った。第四五・四六次調査地を合わ せた総面積は二〇〇〇〇坪で、ほぼ藤原京左京六条三坊の東北坪と 東南坪に当たる。このうち第四七・五〇次（西）調査地は六条三坊 の中心部および東北坪西南部に当たる。両調査地は東西に接してお り、面積は合わせて四〇〇〇坪である。
		第四五次から第五〇次までの調査の所見を簡略に述べると、遺構 は古墳時代から室町時代まであり、そのうち藤原宮期はA・B二時 期に大別できる。
		A期は道路と区画の界を中心とした時期で、東三坊坊間路、六条 条間路、坪の周囲を限る界、坪を東西あるいは南北に一分する界な

どである。坊間路は八二m、条間路は六〇m分を検出したが、条間路は想定位置より約一四m北にある。両路は調査地西端で交差する。

建物は、東南坪に小規模建物一棟、東北坪に三棟ある。この三棟の建物は柱筋を捕える關係にあるが、その性格は今のところ不明である。坊間路の北には東西大溝SD四一三〇があり、奈良時代にも存続する。調査地東端の香久山に近接する付近には幅一九m以上、深さ一・二mの南北大溝SD四一四三があり、東三坊大路想定位置に当たるが、大規模であることから藤原京の東堀河である可能性がある。先の東西大溝SD四一三〇はこのSD四一四三に接続する。

B期は道路や区画の網が大きく改められ、大規模な建物が整然と配されて坊内の利用状況が一変する時期である。まず条間路・坊間路や、東南坪を南北に分ける網は廃され、東北坪・東南坪とも坪内を東西に二分する南北界より西が一体のものとして利用され、東半部は空閑地となっていたようである。

建物は、坊間路・条間路が交差していた位置のやや南で、坊の中心に当たるところに七間×三間の身舎に土庇のついた東西棟建物SB五〇〇〇があり、これをを中心に八棟の東西棟建物や南北棟建物が整然と並ぶ。SB五〇〇〇はこの建物群の正殿とみられ、前殿や脇殿に相当するとみられる建物もある。

これらの建物群は正殿が坊の中心部にくるので、一坊全体の占地に基づく配置と考えられるが、一坊の占地は藤原京では初めての検

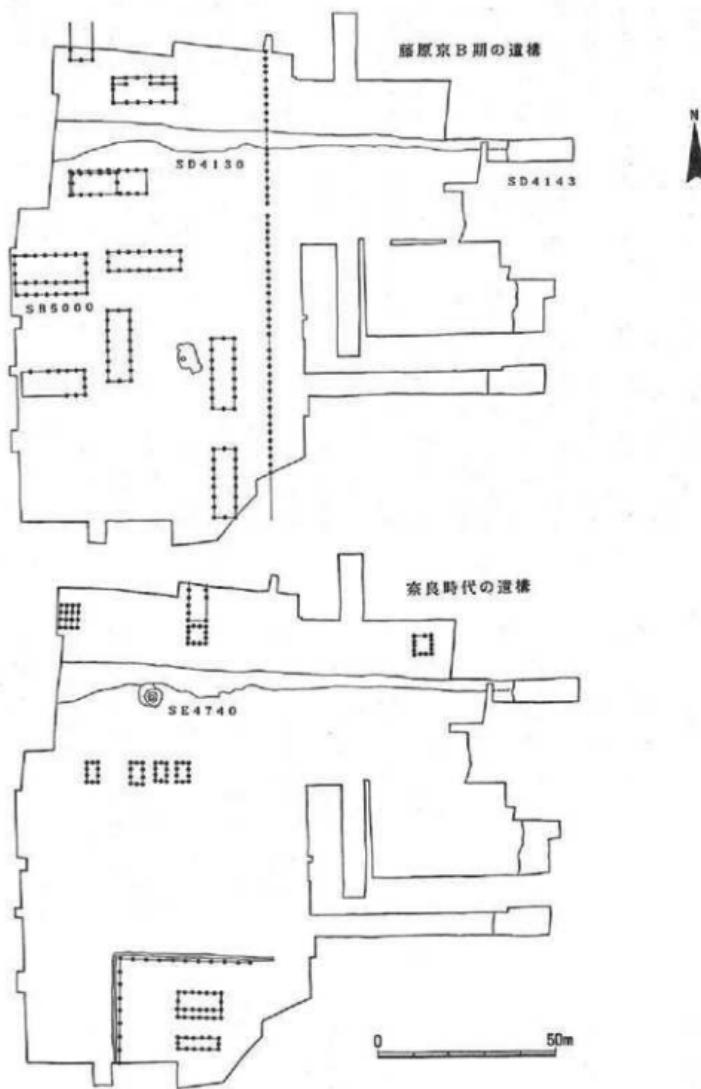
出例である。その性格については官殿邸宅とも、官衙とも考えられるが明確でない。

次に奈良時代になると、大規模な区画施設や整然とした建物群はみられなくなるが、なお建物一〇棟が検出されており、引続き重要地域として機能していたようである。

調査地南半では堀と溝による方形区画内に南北に並ぶ二棟の東西棟建物を配置しており、北半では柱の倉庫風建物や、東西に並ぶ小建物がある。また藤原京A期以来の東西溝SD四一三〇がこの時代にも存続しており、その第四七・五〇次（西）調査地内で木簡・墨書き器が出土した。また第四七・五〇次調査地には大溝の南岸に接して井戸SE四七四〇があり、呪符・墨書き器が出土した。

東西大溝SD四一三〇は坊の想定心から三六m北の位置にあり、総長一〇m分を検出した。東方では幅四・五m、深さ一・五mであるが、西に向かって次第に深くなり、調査地西端では幅一m、深さ一・八mを測る。東端は南北大溝に接続するが、溝底のレベルからみて西流しているのであろう。北岸は比較的直線的で、当初の姿をとどめているとみられるが、南岸には大きくなされた部分がある。堆積土は下から茶褐色砂礫・青灰色粘質土・灰褐色粘質土および淡い褐色粘質土に分けられる。茶褐色砂礫層は溝底にわずかに残存し、七世紀の遺物を含み、この溝の開削が藤原宮期までさかのぼることを示している。青灰色粘質土は奈良時代の層で、何度も流

1986年出土の木簡



第47・50次(西)遺構略図

路を変えるが、平安時代になつて埋め立てられた。

この跡からは多数の遺物が出土しているが、藤原宮跡のものは少

なく、奈良時代から平安時代にかけての遺物が多い。主な遺物としては、木簡二五点、墨書のある斎弔一点、「香山」の墨書土器三点など墨書き土器六点、胸鏡・縁袖歯脚鏡・風字鏡・黒色土器・土馬・製塙土器・ミニチャーフ土器・繩羽口・ベルメット押捺文軒丸瓦・人形・斎弔・刀子形・馬形・木針・櫛・琴柱・鉄釘・和同開珎が出土した。木簡と墨書のある斎弔は東西大溝のうち、南岸に接する井戸付近から西の奈良時代の層から出土した。雲龜三年の年紀のあるものがあり、他の木簡も奈良時代前半のものとみてよいであろう。

東西大溝SD四一三〇の南岸に接する井戸SE四七四〇は、方形横板組で、内法一刃〇・九mあり、横板は平均一二枚ほど残り、高さ三・〇m内外である。掘形は上端が径約六mの不整円形で、底部は一边一・七m内外の方形となる。深さは三・六mある。井戸枠内からは呪符一点の他、「香山」の墨書き土器一〇点など墨書き土器三一点、土師器・須恵器・黒色土器・瓦・鎌・環状鉄製品・鉄釘・小環付金銅製細棒・無文銀錢・和同開珎等が出土した。土器は最下層から飛鳥VI・平城宮Ⅲ段階、下層から平城宮Ⅲ段階、中層から平城宮Ⅳ段階、上層からは九世紀末一〇世紀初頭のものが出土した。呪符は最下層から、墨書き土器の大半は下層からの出土である。

## 8 木簡の叢文・内容

### 井戸SE四七四〇

(1) □不殺 (符籤)未方女者

(上面墨縁アリ)

150×15×5 061

東西大溝SD四一三〇

(2) 「収靈龜三年稻養×

(3) 「葉採司謹白奴○鷗池□□」

・「別申病女○如○」

・「斤得三束○東○」

・「四月○日○」

・「代○水○」

百廿七束○肥々

(118)×(20)×4 051  
203×29×3.5 011

(200)×18×4 019

061  
(31+26)×32×2 019

97×(17)×3 081  
(84)×29×4 019

(41)×(18)×1 081

(9) □夫等

(8) □小豆□□□□

(7) 「斗四升」

(6) 「廿六日」

・「三六」

・「代○水○」

019

019

019

019

019

019

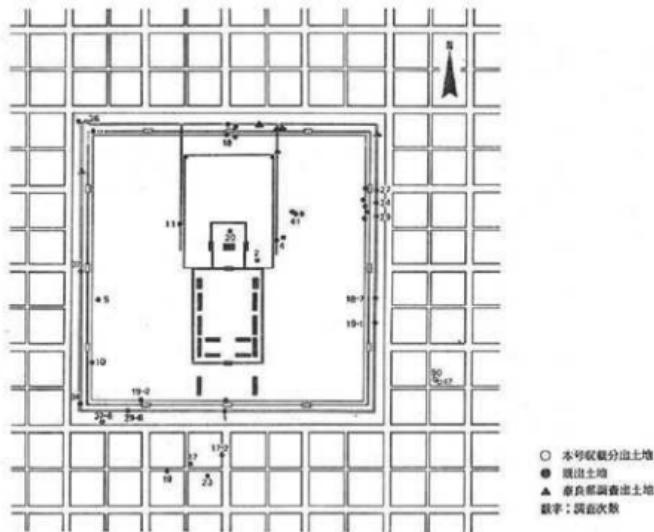
⑩

・「近江国蒲×・「宿□ 戸×00 「六斗」(95)×22×4 0.8  
135×22×5 0.2  
163×23×6 0.103 「左京職」(第弐)

(2)の木簡は官司あるいは庄所などで穀の収納を示しているが、貢進物荷札や「業採司」と記した木簡があるので官司の可能性がある。天平二年の『大倭國正税帳』によれば養老四年と七年に「香山正倉」の存在が知られるが、この木簡と関係があるか。多量の「香山」の墨書き器が出ているよう、カグヤマを「香山」と書く例が多い。今は香串で、左京職は平城京のものであろう。そうすると、平城左京職との場所との関係が問題となる。平安京の例では左京職の官衙神として左京「条に久慈真智命神が祀られており、『延喜式』(神名上)ではこの神について「本社 坐大和國十市郡天香山坐櫛真命神」とあるので、天香山に鎮座の神を分祀したものであることが知られる。あるいは手掛かりとなるであろうか。

## 9 関係文献

- 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報(Ⅳ)』  
 同『飛鳥・藤原宮発掘調査概報一七』(一九八七年) (加藤 優)  
 (一九八七年)



## 奈良・和田廃寺

26



(吉野山)

本調査は和田廃寺第三次調査として行ったもので、場所は「山田道」の後身かと推定される興福寺原神宮東口停車場線の北側に接する水田で、第二次調査で検出した塔跡（大野塚）の東南約120mに当たる。調査地は南北2地区に分かれ、面積は二四五m<sup>2</sup>である。

北区は全体が東南から西北への流路内で、弥生時代から中世までの遺物が混じりあつてある。古墳時代の

- 1 所在地 奈良県橿原市和田町
- 2 調査期間 一九八六年（昭61）一〇月～一月
- 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
- 4 調査担当者 岡田英男
- 5 遺跡の種類 寺院・都城跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代～三世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

- (1) □ 大八幡 (2) □□□□□□□ 東

(100) × (100) × 5 681

木簡は古代のものとみられるが、中世遺物と共に出土したので、はつきりした時期はわからない。「大八幡」は日本を指す言葉として宣命等に用いられるが、宣命では「大八洲」と記す例が多い。

### 9 関係文献

奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮跡発掘調査出土木簡概報』（一九八七年）  
同『飛鳥・藤原宮跡発掘調査概報一七』（一九八七年）

（加藤 優）

土器や中世の土器類は多量に出土したが、藤原宮跡、奈良時代のものは少ない。他に、るっぽ・細羽口・鉢津など铸造關係の遺物、滑石製孔円盤一点、延喜通宝一点、木簡一点が出土した。

南区では東西九mにおよぶ計一個の中世の立石列を検出した。現察道が「山田道」を踏襲しているならば、中世の「山田道」の北路肩の可能性があるが、また西にある粟飯堂の前身遺構とも考えられる。

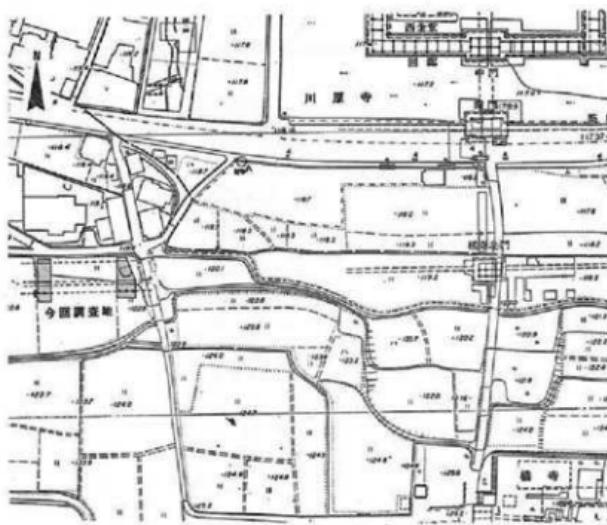
## 奈良・橘寺



(吉野山)

○一とその北雨落溝SD○二で、SA○一は東区で二間分、西区で一間分を確認

1 所在地	奈良県高市郡明日香村橘
2 調査期間	一九八六年(昭61)九月~一月
3 発掘機関	奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
4 調査担当者	岡田英男
5 遺跡の種類	寺院跡
6 遺跡の年代	七世紀~一五世紀
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要	本調査地は橘寺の西北約一七〇mの地点で、橘寺とその北に位置する川原寺との旧境界と考えられる里道の南側である。調査区は東西二カ所に分れ、面積は一六〇坪である。遺構は大別してⅠ期(七世紀後半)・Ⅱ期(八世紀中頃)・Ⅲ期(中世)に区分できる。



橘寺調査位置図(1:2000)

し、一五間分が復原できる。SD○二は塙心から三m北にある素掘り溝である。Ⅲ期は土塙SK○五がある。東西四・五m、南北三・

五m、深さ一・五mで、遺宮工事の発掘や瓦を投棄したゴミ捨て穴と推定される。この土壙やII期盤地層から出土した瓦は川原寺創建瓦を含む七世紀後半のもの、土器は藤原宮跡から奈良時代中頃のものである。土壙中から木筒が九点出土した。III期はSA○一から五m北に設けられた築地塀SA○三とその北面落溝SD○四、土壙SK一〇等である。SA○三は基底部幅三m、残存高約〇・五mで、築地本体は削平されていた。SD○四は築地の北二mにあり、深さ一・二m、復原幅二mで、鎌倉時代初期の土器・瓦が大量に出土した。この築地は以前に確認している橘寺北限の築地塀の西延長部で、今回北門心から一五四m分確認したことになり、北限はさらに西に延びる。築地基底部出土の遺物からみて、前身の築地があつたとしても八世紀中頃以前にはさかのぼりえない。それ以前は南の東西塀が北限施設であった可能性が生じてくる。これらの跡や築地は川原寺の伽藍方位に一致し、遺物の上でも同寺と共通するものが多いため、古代においては橘寺の北限域は、川原寺の強い影響下にあつたらしい。

五m、深さ一・五mで、遺宮工事の発掘や瓦を投棄したゴミ捨て穴と推定される。この土壙やII期盤地層から出土した瓦は川原寺創建瓦を含む七世紀後半のもの、土器は藤原宮跡から奈良時代中頃のものである。土壙中から木筒が九点出土した。III期はSA○一から五m北に設けられた築地塀SA○三とその北面落溝SD○四、土壙SK一〇等である。SA○三は基底部幅三m、残存高約〇・五mで、築地本体は削平されていた。SD○四は築地の北二mにあり、深さ一・二m、復原幅二mで、鎌倉時代初期の土器・瓦が大量に出土した。この築地は以前に確認している橘寺北限の築地塀の西延長部で、今回北門心から一五四m分確認したことになり、北限はさらに西に延びる。築地基底部出土の遺物からみて、前身の築地があつたとしても八世紀中頃以前にはさかのぼりえない。それ以前は南の東西塀が北限施設であった可能性が生じてくる。これらの跡や築地は川原寺の伽藍方位に一致し、遺物の上でも同寺と共通するものが多いため、古代においては橘寺の北限域は、川原寺の強い影響下にあつたらしい。

奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮跡調査出土木筒概報』(一九八七年)  
同『飛鳥・藤原宮跡調査報告一七』(一九八七年)

(加藤  
徳)

(九) 関係文献  
(一九八七年)

S A ○三は基底部幅三m、残存高約〇・五mで、築地本体は削平されていた。SD○四は築地の北二mにあり、深さ一・二m、復原幅二mで、鎌倉時代初期の土器・瓦が大量に出土した。この築地は以前に確認している橘寺北限の築地塀の西延長部で、今回北門心から一五四m分確認したことになり、北限はさらに西に延びる。築地基底部出土の遺物からみて、前身の築地があつたとしても八世紀中頃以前にはさかのぼりえない。それ以前は南の東西塀が北限施設であった可能性が生じてくる。これらの跡や築地は川原寺の伽藍方位に一致し、遺物の上でも同寺と共通するものが多いため、古代においては橘寺の北限域は、川原寺の強い影響下にあつたらしい。

S A ○三は基底部幅三m、残存高約〇・五mで、築地本体は削平されていた。SD○四は築地の北二mにあり、深さ一・二m、復原幅二mで、鎌倉時代初期の土器・瓦が大量に出土した。この築地は以前に確認している橘寺北限の築地塀の西延長部で、今回北門心から一五四m分確認したことになり、北限はさらに西に延びる。築地基底部出土の遺物からみて、前身の築地があつたとしても八世紀中頃以前にはさかのぼりえない。それ以前は南の東西塀が北限施設であった可能性が生じてくる。これらの跡や築地は川原寺の伽藍方位に一致し、遺物の上でも同寺と共通するものが多いため、古代においては橘寺の北限域は、川原寺の強い影響下にあつたらしい。

木筒 (3)



### 8 木筒の軽文・内容

(1) 「△□川郡□□湖□□□□」

・「△□十一□□」

158×21×3 0.02

(2) ×魚煮一連上

(92)×15×2 0.09

## 京都・長岡京跡(4)



(京都西南部)

所在地 京都府長岡京市今里北ノ町  
調査期間 一九八六年(昭61)八月~九月  
発掘機関 長岡京市埋蔵文化財センター  
調査担当者 岩崎 誠  
遺跡の種類 都城跡  
遺跡の年代 八世紀末

- 7 遺跡及び木簡出土遺物の概要  
本調査は、倉庫建設に伴う事前調査として実施した。調査地は、  
長岡京跡右京三条二坊十四町推定地にあり、三条条間小路南側溝の  
検出が予想された。このた  
め、長岡京跡右京第一三九  
次(7 AN I KC-4地区)調  
査として行った。

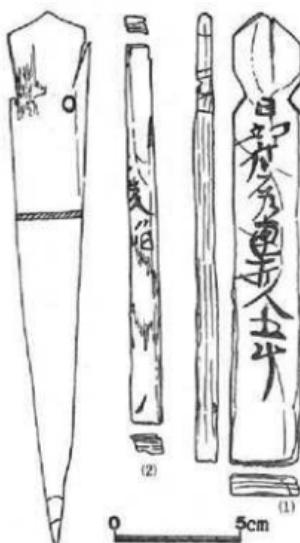
は、幅1・5日、深さ0・1日を測る。埋土は、下層の砂層と上層  
の粘質土層に分かれ、両層から長岡京期の遺物が出土した。木簡一  
点は、上層から出土したもので、伴出遺物には、土器類、カマ口、  
糞串等があり、下層からは、和同開珎、墨書き土器等が出土した。  
8 木簡の篆文・内容  
(1) 「△日部郷□通赤人五斗」  
178×27×9 032  
(2) 「□□×

×□□□□」

150×130×7 011

(3) 「○」(糞串の墨書き)

211×32×2 061  
(岩崎 誠)



## 「平城宮木簡 四」の刊行

平城宮跡出土木簡の正報告書としての第四集が刊行された。

対象となるのは昭和四一年に宮の東南隅で実施された第三二次補足調査で出土した木簡である。同調査では宮の南を限る大垣の北を流れる東西溝から一万二千点をこえる大量の木簡が出土した。削屑がその大半を占めるとはいえ、式部省で行わるる考課・選叙の關係木簡がまとまって出土している。すでに『平城宮発掘調査出土木簡概報』の中に訳文の一部が略報告されておりが、その正報告書にある。同調査の一万余点余の木簡を一冊でまとめるることは困難なため、三分冊に分けて刊行することとなり、「平城宮木簡 四」はその第一分冊である。約二千五百点の木簡の写真図版と別冊の「解説」よりなり、「解説」には造構の概要・考選木簡の分析・訳文等が掲載されている。

奈良国立文化財研究所発行

(コロタイプ 図版二二〇枚 解説八五版・本文四一四  
頁 一九八六年三月刊 領価二十五、〇〇〇円、丁一、五  
〇〇円 解説のみ三、六〇〇円、丁四〇〇円)

奈良市橋本町三六番地 奈良市新印刷

『長岡京木簡一』

向日市教育委員会発行

コロタイプ 国版 B4版 51枚

解説 A5版三二〇頁

一九八四年刊

頃価 図録・解説共 一五〇〇〇円

送料 不要 図録のみ 四五〇〇円

△中込先▽ 真陽社

## 木簡研究 第三号

巻頭言——中國簡漢呼称についての提言——

大庭脩

一九八〇年出土の木簡

概要 平城宮・京跡 平城京左京(外京)五条五坊七坪 藤原宮  
跡 稲田遺跡 下ノ道 長岡京跡 大藏司遺跡 西沖遺跡  
御殿・二之宮遺跡 野路岡田遺跡 多賀城跡 漆町西遺跡 楠  
町遺跡 白山橋遺跡 御館遺跡 御着城跡 第・城山遺跡 草戸  
千軒町遺跡 野田地区遺跡 觀世音寺僧房跡 大宰府学校院跡 東  
辺部

一九七七年以前出土の木簡(三)

平城宮跡(第二次・第三次北) 薬師寺 下岡田遺跡

薬師寺

下岡田遺跡

中国における簡牘研究の位相

池田温

庸米付札について

狩野久

静岡県城山遺跡出土の具注唇木簡について

原秀三郎

草戸千軒町遺跡出土の木簡——形態を中心にして——

志田原重人

裁報

価額 三五〇〇円  
四〇〇円

## 大阪・津田トツバナ遺跡



(大阪東北部)

所在地 大阪府枚方市津田北町二丁目  
調査期間 一九八五年(昭60)六月~一九八六年三月  
発掘機関 特殊方市文化財研究調査会  
遺跡の種類 集落跡  
遺跡の年代 旧石器時代、古墳時代前期~鎌倉時代前半  
遺跡及び木簡の概要  
津田トツバナ遺跡は、枚方市の東部、穂谷川の左岸に位置し、生駒山系より連なる丘陵地の裾部に立地する。丘陵上には室町時代の山城、津田城跡があるほか、周辺には旧石器時代から中世の遺跡が点在している。  
府立高校の建設に伴い発掘調査が行われた結果、旧石器が出土し、古墳時代から鎌倉時代前半までの遺構が検出され、その間、断続的に集落が営まれていること

- 1 所在地 大阪府枚方市津田北町二丁目
- 2 調査期間 一九八五年(昭60)六月~一九八六年三月
- 3 発掘機関 特殊方市文化財研究調査会
- 4 調査担当者 桑原武志・片岡修・西田敏秀・宇治田和生
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 旧石器時代、古墳時代前期~鎌倉時代前半
- 7 遺跡及び木簡の概要

### 木簡の积文・内容

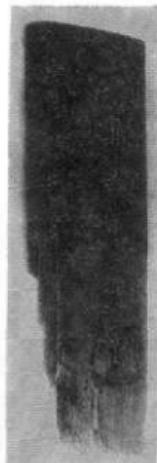
#### 8 木簡の积文・内容 (1) 「一。屋形山札事 (花押)

右預方城山國中奈良住人。国東 (金印) (175) × (47) × 2 681

木簡の年代は三世紀代と考えられ、左側が欠損しているが、上部が山形になっており、上・下に孔を穿つ。入金山への入山証か。「屋形山」は、南東約三kmに鎮座する三ノ宮神社の宮山のことであり、神社は屋形大明神とも呼ばれていた。『當鄉田跡名勝誌』に、嘉吉二年(1442)の棟札のことが書かれており、「山城國山子トハ津田村ノ領内屋形山ヲ城丹ノ内、松井村内里村戸津村ヘ當テ作り仕ツ候故、山子ト申ス(略)」とある。これらの村は、京都府八幡市にあり、それらの村に隣接して奈良の地名も存在しており、本木簡の「奈良」も地名と考えられる。

(宇治田和生)

がわかった。鎌倉時代に属する遺構としては、掘立柱建物・井戸・土壙・焼土壙などがある。木簡は、沸によって固まられた建物跡群の北東部に隣接する井戸内から出土した。



## 兵庫・祢布ヶ森遺跡

にゅうぶがもり



(出石)

祢布ヶ森遺跡は、但馬國分寺の西南約五〇〇mの段丘上に位置する官衙的性格をもつ遺跡である。県立考古研究所所跡地に町立文化体育館を建設することになり、日高町教育委員会が事前に発掘調査を行った。

調査の結果、西方から統一された段丘が調査区の西端付近で終わり、小さな段丘崖を形成している。これより東方にかけては、旧流路による氾濫原になる。氾濫原は、

- 1 所在地 兵庫県城崎郡日高町祢布
- 2 調査期間 一九八六年(昭61)六月~九月
- 3 発掘機関 日高町教育委員会
- 4 調査担当者 加賀見者一
- 5 遺跡の種類 官衙跡
- 6 遺跡の年代 古墳時代~平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

- (1) ×(符號) 急々如律令  
■
- (288) × (24) × 5 081
- (加賀見者一)

用地の東方へさらくに続き、調査で確認できた幅は四〇mを越える。遺物は、古い段階の流路の堆積土に含まれ、上層からは九世紀中頃から後半の土器・漆紙文書などが出土し、下層からは九世紀初頭の人形など木製模造品が出土している。木簡は、これらの木製模造品と共に出土しており、同時期のものと考えられる。なお、遺構は検出できなかった。

- 8 木簡の积文・内容

愛知・清洲城下町遺跡(1)

- |   |   |   |   |                          |
|---|---|---|---|--------------------------|
| 4 | 3 | 2 | 1 | 所在地                      |
|   |   |   |   | 愛知県西春日井郡清洲町              |
|   |   |   |   | 調査期間                     |
|   |   |   |   | 一九八六年(昭61)四月～一九八七年三月     |
|   |   |   |   | 発掘機関                     |
|   |   |   |   | 愛知県埋蔵文化財センター             |
|   |   |   |   | 調査担当者                    |
|   |   |   |   | 小澤一弘・細野正俊・水谷朋和・中野良法・梅本博志 |
|   |   |   |   | 博志                       |

遺跡の種類 城郭・都市跡  
遺跡の年代 平安時代～江戸時代

道器五事ノ旨

清洲は、織田信長の居城地として知られているが、中世において



《名古屋北部》

も、尾張の守護所が置かれていたこの地方の中心都市であり、また、信長以後も、豊臣、徳川政権下の有力大名が次々と入城し、慶長一五年（一一〇）の名古屋築城年に至るまでは全国屈指の城下町を形成していた。

の調査は、昭和五六六年から継続的に実施されているが、遺跡全体が五条川流域の低湿地帯に位置することから、木製品の出土も多く、墨書きをするものも現在まで二〇〇〇点近くが発見されている。

昭和六一年度は、五ヵ所の調査区で、合わせて約八〇〇〇m<sup>2</sup>の発掘調査を実施したが、このうち、二地点において、木簡類の出土があった。

#### 一 神明町地区 (IKJS-1-A-B)

名古屋環状二号線建設に伴う事前調査として実施。調査地点は、『清須村古城絵図』によれば、「中堀」と「内堀」を結ぶ南北方向の大溝の位置にあたり、発掘の結果でも、幅四五m、深さ二m余りの「堀」の存在を確認することができた。

板塔婆の出土した溝SD-1七は、天正一四年(一五八六)頃と考えられるこの「堀」開墾時の整地により埋没している。

#### 二 本町地区 (IKJH-1-D)

五条川河川改修に伴う事前調査として実施。この地区は、「外堀」と「中堀」の間にあたり、城下町期では町屋を中心とした地区であり、また、「清須越」以降においては、美濃街道の宿場としての町並みが形成されていた部分である。このうち、今回の調査地点は、宿場の発展に伴い近接する基目寺村より移転したとされる「久証寺」の旧境内地にあたっている。

祐經の出土した土壌SK○五は、東西七・二m、南北一八m程の

ほぼ長方形の池状の遺構であり、この埋土下層からは、祐經の他に「志野」「織部」をはじめとする多量の陶磁器類、あるいは、箸、漆碗などの木製品が一括出土している。埋土上層は、厚い整地層となっているが、これは、寛永元年(一六二四)のこととされる「久證寺」建立に伴うものである可能性が高い。

#### 8 木簡の仮文・内容

#### 一 神明町地区 (IKJS-1-B)

##### 溝SD-1七

(1) ×無妙法蓮華經 [為九] □不復受

七月×(86+23)×(63)×3 81

板塔婆の断片であり、文言、書体から法華宗系と考えられる。清洲城下町遺跡では、断片を含め、現在までに二八点の板塔婆の出土例があるが、法華宗系と考えられるのは、この一点のみである。征目材を用い、焼損のため頭部の形状は不明であるが、下端は串状となる。

#### 二 本町地区 (IKJH-1-D)

##### 土壌SK○五

(1) □[波] 署密多無

69

般若心經を書写した祐經の断片。清洲城下町遺跡では、現在まで



新潟城下町の「羅」の復元と木簡の出土地点

●昭和60年度以前 〔昭和61年度〕

に、二地点から二四点ほど柿經の出土例があるが、原典が確認されたものは、いずれも法華經であり、それ以外の經典を書写したもののは、本例が初めてである。

なお、木簡の査証にあたっては、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部加藤優氏の御指導を得た。記して感謝したい。

9 関係文献

『新潟県埋蔵文化財センター』『年報 昭和六一年度』（一九八七年）

（海本博志）

## 愛知・清洲城下町遺跡(2)

1 所在地	愛知県西春日井郡清洲町
2 調査期間	一九八七年(昭62)一月～三月
3 発掘機関	清洲町教育委員会
4 調査担当者	高橋信明
5 遺跡の種類	城郭・都市跡
6 遺跡の年代	平安時代～江戸時代
7 遺跡及び木簡出土遺物の概要	清洲(名)の地名は、一四世紀頃の「神鳳抄」にキヨスとみえるのが最初である。清洲の歴史的重要性が高まつたのは、文明八年(一四七六)に尾張守護所が下津城から清洲城へ移されてからである。尾張の中心都市としての機能は、織田信長の入城から、慶長一五年(一六一〇)の名古屋城築城までである。以後、五条川を利用した城下町は解体され、美濃街道の宿場町とな



(名古屋北部)

清洲(名)の地名は、一四世紀頃の「神鳳抄」にキヨスとみえるのが最初である。清洲の歴史的重要性が高まつたのは、文明八年(一四七六)に尾張守護所が下津城から清洲城へ移されてからである。尾張の中心都市としての機能は、織田信長の入城から、慶長一五年(一六一〇)の名古屋城築城までである。以後、五条川を利用した城下町は解体され、美濃街道の宿場町とな

つた。

清洲城下町遺跡は、昭和五六年以降の継続調査で徐々に解明され

つつある。今回の調査地は、本丸跡の五条川対岸に位置し、幅一七  
mと幅一四mの溝を検出した。いずれも一六世紀前半に掘削されて  
おり、多量の施釉陶器に伴って三点の木簡が出土した。

## 8 木簡の現文・内容

(1) 「□月□」

210×23×5 051

(2) 「此事たて

申

さいすへて「□一」のす

はりなりと

なら「□へは御ひ

」「い□ひにし「□  
」

△△

のふ／＼これと

てすて申すもの

つらにまうし

めあてたやのふ／＼」

（3） 十一  
一光一平  
人田 □ □ □ □ □ □ □

（4） 十二  
人寺 □ □ □ □ □ □ □

(361)×(75)×5 066

(2) はほぼ仮名書きである。消息文の一部であろうか。板材は完形

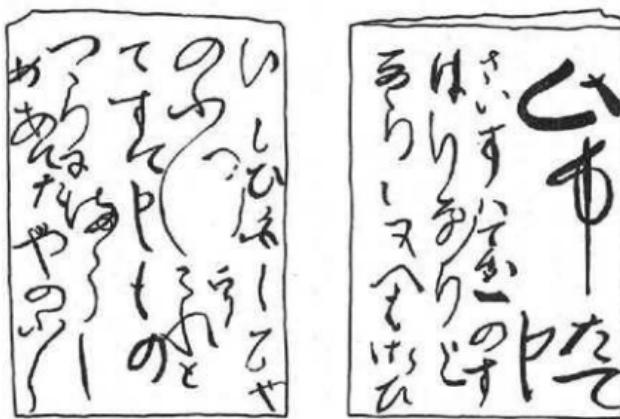
品であるため、何枚かのセットになった一枚であろうか。  
(3) は本来の形状を留めず転用されている。人數・人名・地名の記  
載からみて、何かの帳簿であろうか。近隣に平田の地名が残ってい  
る。

なお、木簡の現文は、奈良國立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調  
査部加藤優氏の全面的な御指導を得た。記して感謝します。

## 9 関係文献

時愛知県埋蔵文化財センター『年報 昭和六一年度』(一九八七年)

(高橋信明)



(2)

## 木簡研究 第七号

卷頭言——刀筆の史——

土田直義

## 一九八四年出土の木簡

概要 平城宮・京跡 平城京跡 奈良女子大学構内遺跡 法賀寺遺跡 藤原宮跡 長岡京跡(1) 長岡京跡(2) 長岡京跡(3) 百々遺跡 今里遺跡 平安京左京八条三坊二町 平安京左京九条二坊十三町 水走遺跡 四ノ辻遺跡(1) 西ノ辻遺跡(2) 拝井遺跡 忍ヶ丘駅前遺跡 跡 普賢寺遺跡 大庭北遺跡 駿里遺跡 甲環濠都市遺跡 池田寺遺跡 道場塙田遺跡 新方遺跡 川岸遺跡 船見遺跡 前東代遺跡 赤堀城跡 朝日西遺跡 清瀬城下町遺跡 吉田城三ノ丸  
跡 坂尻遺跡 秋合遺跡 郡遺跡 神明原 元宮川遺跡 北条寺跡  
・時賴邸跡 千葉地遺跡 千葉地東遺跡 蔵屋敷遺跡 小数出遺跡  
大津城跡 上永原遺跡 野々宮遺跡 野瀬遺跡 小谷城城下町遺跡  
尾上遺跡 北方田中遺跡 永田遺跡 鹿嶋B遺跡 鶴羽清水遺跡  
仙台城三ノ丸跡 市川橋遺跡 多賀城跡 比爪館遺跡 大浦遺跡  
松田跡 馬場屋敷遺跡 百間川当原遺跡 鹿田遺跡 草戸千軒町  
遺跡 西庄Ⅰ遺跡 井上薬師堂遺跡 芦原目連道跡

## 一九七七年以前出土の木簡(七)

平城宮跡(第三九次)

公式様文書と文書木簡

中國における般若の漢譜研究

英國出土のローマ木簡

木簡史料紹介 牛札

参考

早川庄八  
大庭祐  
田中琢  
石上英一

編集 三八〇〇円 二四〇〇円

## 木簡研究 第四号

専題言　木簡保存法の思い出

坪井清足

### 一九八一年出土の木簡

概要　平城宮跡　奈良女子大学構内遺跡　法隆寺　藤原宮跡　長岡京跡　三条西殿跡　鳥羽離宮跡　若江遺跡　佐嘗遺跡　大阪城  
三の丸（大手口）遺跡　小曾根遺跡　尾張國府跡　下津城跡　坂尻遺跡　小川城跡　恒川遺跡　三ツ寺II遺跡　下野國府跡　多賀城跡　郡山遺跡　胆沢城跡　道伝遺跡　笠原遺跡　明成寺遺跡  
安田遺跡　大森鍾乳遺跡　高堂遺跡　塗町遺跡（C地区）　南吉田葛山遺跡　百間川遺跡群（東尾島遺跡）　草戸千軒町遺跡　道照遺跡　長門國分寺跡　野田地区遺跡　湯川神社境内遺跡　大宰府跡（大楠地区）　九州大学（筑紫地区）構内遺跡　長野遺跡  
辻田西遺跡

### 一九七七年以前出土の木簡（四）

呪符木簡の系譜  
平城宮跡（第二三次南・第二七次・第二八次・第二九次）  
木簡と上代文学——水産物付札をめぐって——  
「漆紙文書」出土概要

和田　翠  
小谷博泰  
佐藤宗諦

額面　三五〇〇円　裏面　三四〇〇円

# 千葉・浜野川遺跡



(千葉) 浜野川遺跡  
時代中期の貝塚と弥生

- 所在地 千葉市南生実町  
調査期間 一九八五年（昭60）六月～一九八六年三月  
発掘機関 千葉県文化財センター  
調査担当者 伊藤智樹・金丸 誠・山田貴久  
遺跡の種類 遺物包含地

・近世

- 7 遺跡及び木簡出土遺物の概要  
浜野川遺跡群は、千葉市の南端部に位置し、標高6m前後の海岸  
平野上の低湿地遺跡である。

遺跡の北側は、中世の小弓  
城跡のある台地と接し、南  
側は水田地帯を挟んで村田  
川をのぞんでいる。河川改  
修と都市計画道路建設事業  
とともに発掘調査では、

た。古代・中世の遺構は検出されず、遺物も、やや渾然一体とした  
状況で出土した。後者の遺物としては、曲物・漆塗の椀などの破片  
があげられる。木簡は、調査区東端でそれらの遺物などと共に包含  
層より出土した。  
8 木簡の积文・内容  
(1) 〔鬼〕  
〔□〕急如律令  
(88)×20×2 019

（金丸 誠）

文字はいずれも赤外線テレビにより判読した。木簡の上部に墨痕  
は認められるが判然としない。通常この種の呪文では「急」の後に  
「ミ」の文字のみえることが多いが、本例では認められない様であ  
る。

## 滋賀・光相寺遺跡



光相寺遺跡は、野洲郡の中主町大字西河原に入った冲積平野に立地する。今回の調査は、中主町の土地区画整理事業に伴う第五次調査として実施したものである。

調査の結果、奈良時代前期の掘立柱建物跡、溝跡、自然河道等を検出した。木簡は、長さ二二m以上、幅二・五m、深さ三〇cmの溝跡から出土した。溝跡は、茶褐色腐植土が堆積してお

- 1 所在地 滋賀県野洲郡中主町大字西河原
- 2 調査期間 一九八六年(昭61)四月~一月
- 3 発掘機関 中主町教育委員会
- 4 調査担当者 德利克己・山田謙吾
- 5 遺跡の年代 奈良時代前期
- 6 遺跡の種類 集落跡
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

- 1 所在地 滋賀県野洲郡中主町大字西河原
- 2 調査期間 一九八六年(昭61)四月~一月
- 3 発掘機関 中主町教育委員会
- 4 調査担当者 德利克己・山田謙吾
- 5 遺跡の年代 奈良時代前期
- 6 遺跡の種類 集落跡
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

り、一点の木簡の他に、畜串、人形、刀形、琴柱、横櫛、抉りの加工を施した桃の果核などや、フイゴの羽口と鉢溝、紡錘車(鉄製)馬鍐に取り付ける鍛金具(銅製)が出土した。

光相寺遺跡の第三次調査(一九八五年)では、「石刃」、「口刀自家」、「斧」「富」「稻邑」などの墨書き器が出土しており、今回の調査でも「石刃」が一点出土している。

### 8 木簡の积文・内容

(1) 

(2) 

(234) × (24) × 6.032  
142 × 18 × 5.032

(1)は、木簡の左側を欠く。(2)は、姓名を表わしたもので一九八五年に出土した西河原森ノ内遺跡の一号木簡にも「大友」の氏名がみられる。

### 9 関係文献

中主町教育委員会・中主町埋蔵文化財調査会「西河原森ノ内遺跡第一・二次発掘調査報告書」(中主町文化財調査報告書第九集、一九八七年)  
同「西河原森ノ内遺跡 第三次発掘調査報告書」(同第二集、一九八七年)

(德利克己)

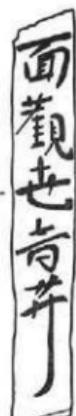
## 滋賀・吉地薬師堂遺跡



- 1 所在地 滋賀県野洲郡中主町大字吉地字薬師堂  
 2 調査期間 一九八六年(昭61)四月~二月  
 3 発掘機関 中主町教育委員会  
 4 調査担当者 德網児己・山田謙吾  
 5 遺跡の種類 集落跡  
 6 遺跡の年代 平安時代~室町時代  
 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要  
 吉地薬師堂遺跡は、吉地の集落から西へ約200mにある南北に広がる中世集落跡である。周辺は、吉地大寺遺跡、光相寺遺跡、光明寺遺跡が隣接しており、遺跡密集地帯の一画を成している。一九八一年から実施されている町施行区画整理事業に伴い調査を行った。
- 8 木簡の収文・内容
- |     |          |                |
|-----|----------|----------------|
| (1) | ×面觀世音菩薩  | (150) × 22 × 3 |
| (2) | ×□地藏菩薩   | (127) × 27 × 6 |
| (3) | ×□如來     | (72) × 26 × 2  |
| (4) | ×天王      | (130) × 21 × 3 |
| (5) | 「南無地藏菩薩」 | (130) × 27 × 4 |
| (6) | 正近       | (62) × 19 × 4  |
- (1)は恐らく「十一面觀世音菩薩」であろう。上下端は、故意に切り落とした形跡がみられる。(2)の上端も同様である。(3)は「如來」の上部に墨痕が残存するが、中途で欠損するため、判読できない。(4)は上下端とも折損する。(5)は主頭で、下端を欠損する。卒塔婆と鎌倉時代の遺構が主体を占める。



(5)



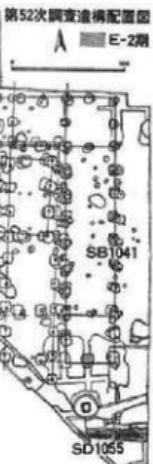
(11)

考えられる。(6)の「正近」は、意味不明である。  
本遺跡出土の木筒は、呪符木筒に属するものと考えられ、草戸千  
軒町遺跡等に類例がみられる。  
(山田謙吾)

## 岩手・胆沢城跡



- |   |               |   |
|---|---------------|---|
| 1 | 所在地           | 岩手県水沢市佐倉河   |
| 2 | 調査期間          | 第五二次調査 一九八六年(昭61)四月~九月  |
| 3 | 発掘機関          | 水沢市教育委員会  |
| 4 | 調査担当者         | 伊藤博幸・佐久間賢・土沼章一  |
| 5 | 遺跡の種類         | 城柵官衙跡   |
| 6 | 遺跡の年代         | 九世紀初頭~一〇世紀  |
| 7 | 遺跡及び木簡出土遺構の概要 | <p>第五二次調査区は、政庁南東の「東方官衙」と外郭南辺内溝に挟まれる南北約六六mの地区で、外郭南門と政庁を結ぶ線の東六五m前後の位置にある。遺構は九世紀初頭から一〇世紀にかかる六期に時期区分され、B期から下期まで、一三期の建物変遷が確認された。このうち、九世紀末から一〇世紀前半にかかるE期官衙(四小間要造)については、院を構成する屋屋</p> |



B-104-A建物に位置を北にずらして改築している。

このSE-1050井戸埋土から、調理・供膳関係の俎・はし・へラ状製品・漆器・木碗・皿、燃料の木炭、食料関係のニホンシカ・ニホンイノシシの骨、タルミ・モモの種子、クリの皮、さらに「厨」のはか「右」「左」などの墨書き器を含む多量の土器、定木・題籜軸とともに、四点の木筒が出土した。

なお、「斯波」の墨書き土器も一点あり、胆沢城と斯波地方との結びつきを示している。

## 8 木筒の积文と内容

(1) 「和我連■蓮白五斗」

(2) 「勘書生吉弥候豈本」

(3) 「王生■永」  
× □生 ■永

145×25×4 051  
(131)×19×8 019  
(25)×(11)×5 081

9 関係文献  
八七年  
水沢市教育委員会『胆沢城跡昭和六一年度発掘調査報告』(一九

(佐久間賢)

と判断された。遺構は、SE-1050井戸を中心として、その北に、SB-1043東西棟、東にSB-1041南北棟を配するもので、南北をSD-1055溝が限る。小一・一期では、SB-1043東西棟(1×5間)とSB-1041-A・B南北棟(1×1間)が側柱列一致させ、各施設が二〇尺方眼(○・三〇五m=一尺)のなかにおおよそ配される。つまり、SB-1043建物東西中心線上にSE-1050井戸がのり、その東六〇尺にSB-1041南北溝が一〇〇尺となる。なお、小三期の段階で、SB-1043建物から、梁行三間、桁行八間のS



(2)

## 山形・生石2遺跡



- 1 所在地 山形県酒田市大字生石字登路田  
2 調査期間 二次調査 一九八五年(昭50)七月~九月、三次  
3 発掘機関 山形県教育委員会  
4 調査担当者 安部 実・伊藤邦弘  
5 遺跡の種類 集落跡・官衙跡  
6 遺跡の年代 弥生時代前期・奈良~平安時代  
7 遺跡及び木簡出土遺物の概要 生石2遺跡は、国指定史跡「城輪古跡」の南東約5kmに位置する。庄内平野の東端、出羽丘陵の山麓にあり、標高100~200mを測る。発掘調査は県営は場整備事業施工区に限つて行つた。調査の結果、板材列に囲まれた官衙様建物の配備構成を持つ遺構群が、東西に走る溝(SD 300)を挟んで北側と南側

- 1 所在地 山形県酒田市大字生石字登路田  
2 調査期間 二次調査 一九八五年(昭50)七月~九月、三次  
3 発掘機関 山形県教育委員会  
4 調査担当者 安部 実・伊藤邦弘  
5 遺跡の種類 集落跡・官衙跡  
6 遺跡の年代 弥生時代前期・奈良~平安時代  
7 遺跡及び木簡出土遺物の概要 生石2遺跡は、国指定史跡「城輪古跡」の南東約5kmに位置する。庄内平野の東端、出羽丘陵の山麓にあり、標高100~200mを測る。発掘調査は県営は場整備事業施工区に限つて行つた。調査の結果、

にそれぞれ検出された。北側の板材列の内部から、獨立柱建物一五棟、井戸一基、溝(SD 100)、土壤などが検出されている。  
南側の板材列内部から、獨立柱建物六棟、井戸二基、土壤、溝状遺構などが検出されている。墨書きは、文字の判読不能なものも含めて五二五点出土した。同一墨書きには「井」(三五七点)、「工」(二三点)などがある。溝SD 300から漆紙文書が一点出土している。

木筒はSD 100の埋土中から出土したもので、他に木材・木製品(弓・曲物・独楽・舟形・鏡・皿など)が多数出土している。

### 8 木筒の釈文・内容

(1) 「義義義義見者有□有神是是是是是」 (a)



柱材(杉か)で棒状を呈する。上端は鋭利な刃物で垂直に近く断ち切られている。下端は溝中に存在していた段階で乾燥を受けたものか一部分収縮している。なお先端には斜めに入る削り痕が見られる。四面に墨書き・墨模がある。(a)面の墨書きは内眼でも鮮明に読み

取れる。赤外線サーベイを使用した観察によれば、(c)面では二文字のほか墨痕が認められ、(b)・(d)面では墨痕だけで文字は不明であった。(a)面については習書と考えられ、他は不明である。溝という性格上、伴出遺物との年代関係はややあいまいになるが、今のところ奈良末と考えたい。

#### 9 関係文献

- 山形県教育委員会『生石2遺跡発掘調査報告書(2)』(山形県埋蔵文化財調査報告書第九九集 一九八五年)
- 同『生石2遺跡発掘調査報告書(3)』(山形県埋蔵文化財調査報告書第一一七集 一九八六年)

(安藤 夷)

## 木簡研究 第五号

卷頭言——木簡史の研究について——

閑 晃

### 一九八二年出土の木簡

摘要 平城宮・京跡 平城京二条大路・左京二条二坊十二坪 白  
毫寺遺跡 藤原宮跡 山田寺跡 阿部六ノ坪遺跡 長岡京跡(1)

長岡京跡(2) 長岡京跡(3) 長岡京跡(4) 仁和寺南院跡 大坂城跡

梶子遺跡 道場田遺跡 野燒遺跡 穴太遺跡 下野國府跡 下野

國府跡寄居地区遺跡 長原東遺跡 多賀城跡 扎田柵跡 日野川

朝宮橋下流 桜町遺跡 出合遺跡 汗井遺跡 助三焼遺跡 肩脊

堀之内遺跡 草戸千軒町遺跡 田村遺跡 高烟庵寺 藤田遺跡

### 一九七七年以前出土の木簡(五)

藤原宮跡

### 字訓史資料としての平城宮木簡

—古事記の用字法との比較を方法として—

### 平城宮出土の衛士関係木簡について

木簡とコンピュータ

### 書評・『草戸千軒——木簡——』

小林 芳規  
鬼頭 清明  
田中 研  
水藤 真

編集

三五〇〇円

四〇〇円

—長岡京出土墨書き土器の概要と考察—

『向日市文化資料館研究紀要』 創刊号

「東土川西遺跡の弥生土器  
—乙頭地域における第5様式・庄内式土器の変遷—」

国下多美樹

「長岡京の墨書き土器」

清水みき

B5版 51頁 一九八七年増刷

『向日市文化資料館研究紀要』 第二号

「墨書き土器の機能について」

一都城（長岡京）の墨書き土器を中心にして

「長岡京発都以後の土地利用」

B5版 48頁 一九八七年発行

清水みき  
山中章

△申込先▽

向日市文化資料館

〒611 京都府向日市寺戸町南垣内40-1

T E L ○七五一九三一一一八二

額 価 各五〇〇円  
送 料 各二〇〇円

# 木簡研究 第六号

卷頭言 — 記紀批判と木簡 —

直木孝次郎

## 一九八三年出土の木簡

概要 平城宮・京跡 平城京二条大路・左京二条二坊十二坪 平  
城京左京八条三坊十一坪 東大寺仏舎下層遺構 藤原宮跡 長  
岡宮・京跡 平安京右京八条二坊 定山遺跡 本走遺跡 津堂遺  
跡 高宮遺跡 池上・曾根遺跡 万町北遺跡 山垣遺跡 福成寺  
遺跡 沢田宮遺跡 長尾冲田遺跡 小川城遺跡 道場田遺跡  
宮久保遺跡 鹿島湖岸北部条里遺跡 東光寺遺跡 北大營遺跡  
鎌脇遺跡 北補付遺跡 鋼沼東Ⅱ遺跡 下野國府跡 多賀城跡  
一乘谷朝倉氏遺跡 近岡遺跡 曾根遺跡 前田遺跡 美作國府跡  
草戸千軒町遺跡 尾道遺跡 芳原城跡 大宰府跡

## 一九七七年以前出土の木簡（六）

平安時代の日記にみえる木簡

日本古代の人口について

叢報

『木簡研究』一～五号総目次

山田 英雄  
鎌田 元一

## 平城宮跡（第三二次）

頒価 三五〇〇円  
平四〇〇円

# 一九七七年以前出土の木簡（九）

奈良・平城宮跡（第三三次補足調査）

所在地 奈良市佐紀町

調査期間 一九六六年（昭41）五月～二月

発掘機関 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

調査担当者 杉山信三

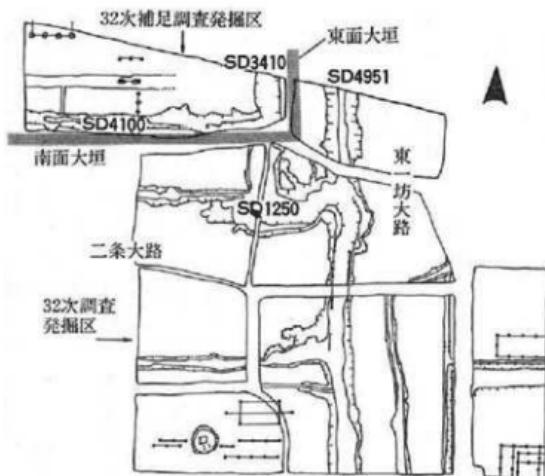
遺跡の種類 宮殿・官衙跡

遺跡の年代 奈良時代～平安時代初期

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

第三三次補足調査は、平城宮東南隅で、本誌六号で紹介した第三二次調査区の北西に接する場所で実施された。調査面積は一八一坪である。検出した主な遺構は、南面大垣と築地一条、建物二棟、櫛四条、溝二条、炉四ヶ所などである。

木簡が出土したのは、南面大垣の北を東へ流れる東西溝SD四一〇〇と、調査区東端で確認された、東面大垣の内側を南流する南北溝SD三四一〇からである。



第32次調査・同補足調査遺構略図

溝SD四一〇〇 SD四一〇〇はA・B二時期に大別できる。S D四一〇〇Aは、調査区西端では南面大垣の心より北へ五mの位置に溝の心があり、溝幅は一・八mをはかる。ところが、東へいくにつれて溝幅が南へ拡がり、一部、南面大垣をえぐるようにして破壊している。調査区の東半では、溝の幅は最大六mにおよんでいる。溝の深さは西端で〇・四m、東へ徐々に深くなり、最も深いところでは一・〇mとなる。溝SD四一〇〇Aの堆積土は、上下二層にわかれ、上層は暗褐色の砂質粘土であり、下層は灰色の砂である。木筒は合計一二八三七点でいずれも下層から出土した。溝底はかなり凹凸があり、土壤状の堆みが木筒の溜り場となつて大量にまとまつて出土した。年紀をもつ木筒も一〇〇点近くあり、それらは上層は神龜五年であるが、神護景雲年間に集中し、下層は宝龟元年である。

SD四一〇〇Aが整地によって埋められたれ、のちにSD四一〇〇Bがほぼ同じ位置を流れることがある。SD四一〇〇Bは溝一・二m、深さ〇・三五m・七mの細い溝である。堆積土は疊混りの灰褐色砂質土で、遺物は少なく、木筒もSD四一〇〇Bからは一点も出土していない。

**溝SD三四一〇** SD三四一〇は第二次廟堂院の東方約一五〇mに位置し、東院地区の西を南流し、東院表出部以南においては東面大垣の内側を流れ、宮城の南で二条大路北側溝SD一二五〇に合流する基幹排水路である。第三次補足調査区では幅が六m、深さ

一・五mとなっている。溝の堆積土は上下二層に大別でき、上層は黒色粘土と灰褐色砂質土、下層は灰褐色粗砂と青灰色砂土が堆積している。木筒は上層から五点、下層から六七点出土した。

なお、SD四一〇〇AやSD三四一〇からは、木筒のほかにも、瓦・土器・金属器・木製品・漆紙文書などが出土したが、その中でも墨書き器は注目される。SD四一〇〇Aから「式舟」など記したものが三点と「式部外曹司進」「式曹」「少祐」「子麻呂子」「麻呂子」「子子子」「子子子」「広原田丹比郡」「舟丹丹」「子泉國」等各一点、SD三四一〇からも「式舟」一点が出土している。

#### 8 木筒の积文・内容

本調査出土木筒の特色は以下のとおりである。

一、SD四一〇〇出土の木筒は削屑が90%以上を占めている。このように削屑が多數含まれていることは、特定の場所で木筒から削りとられた細片が一括して堆積していたものと考えられ、しかも木筒・削屑が溝の同一土層(SD四一〇〇A下層)から滞留した状況で出土したことは、これらの木筒・削屑が一括した、等質の史料としてあつかえることを示唆している。

二、SD四一〇〇出土の木筒の内容はそのほとんどが式部省関係のものと考證される。なかでも考課關係の木筒が多數出土したこと

三、考課木簡は、その形態上の特色として、上端側面から小穴をあけ、紐等で貫通することができるようになっているものが多々みつかった。これは考課關係の木簡の機能を検討する上で重要な手がかりを与えていた。

四、木簡の年紀は神龜五年から宝亀元年までを多くむが、神龜年間のものは発掘区のSD四一〇〇の西端においてのみ出土しているので、それ以外はほとんどが天平神護年中から宝亀元年頃までのものとみてよい。

- (1) 「式部省召 書生佐為宿称諸麻呂  
十二月廿日」 (143) × 35 × 3 019
- (2) 「大学寮解 申宿直官人事少尤從六位上紀朝臣直人  
神護景雲八月朔日 300.毛×1 011 三七五号
- (3) 「大学寮解 申宿直官人事少尤從六位上紀朝臣直人  
神護景雲八年九月十一日」 241 × 33 × 3 011 三七五号
- (4) 「河内職解 申宿直×  
091
- (5) 「諸司移  
〔神護景雲〕 三年」
- (6) 「諸司解 (題簽附) (48) × 29 × 2 061 三七六四号
- (7) 「史生省掌 神護景雲元年 (題簽附)  
〔史生省掌 神護景雲元年 (65) × 30 × 10 061
- (8) 「国解上日 (題簽附)  
〔国解上日 (題簽附) (54) × 24 × 7 061
- (9) 「<sup>(調)</sup>无位田辺史廣〔進綱勞錢伍伯文〕  
〔<sup>(調)</sup>住吉郡國神龜五年九月五日秋庭  
172 × 33 × 3 032
- (10) 「<sup>(調)</sup>位子山辺君忍熊資錢五百文」  
〔<sup>(調)</sup>神龜五年九月七日勘帳原東人〕 161 × 30 × 4 032
- (11) 「<sup>(調)</sup>益田君倭麻呂統勞錢」  
〔<sup>(調)</sup>神龜〔五〕年〔月廿七日〕 144 × 15 × 3 032
- (12) 「<sup>(調)</sup>去上位子從八位上伯称廣地年冊一  
〔河内職解 申宿直〕 302 × 30 × 14 015

83		「去上 従八位下 □□□□守公麻呂 河内国志紀部『上日二百十船稻』」	80	執当騎了	691
84		「去出 位子无位日置造尾 □年 □四 (319)×(7)×6 015 三七九五号」	85	訪察精	691
85		「去不 大初位下 □□□公右京 五十六 (230)×25×6 019 三七九七号」	86	動於記事書失无 □	691
86		去上 留省大初位上秦忌寸祖足 □年	87	□懶善	691 三九二号
87		「去上」大初×	88	□為中等	691 三九三号
88		(72)×25×8 015 三八〇三号	89	上日百五十三	691 三九〇五号
89		「諸司叙位案」	90	上日三百	691 三九一一号
90		「依遣高麗使廻來天平宝字一年十月廿八日進二階叙」	91	265×14×3 051 三七六二号	691
91		「外從初上物部淨人(本姓一葉玉)遠江國敷智郡人 □□□遣 □□便叙位」	92	248×20×4 015 三七七七号	691
92		護元年正月七日恩勃進一階叙	93	226×25×3 011 三七六八号	691
93		今正八上 正八下	94	三七九〇号	691
94		養宿称国足(大和国近下郡) □	95		691

六考日一千

091 11727六号

進七階口

091 11727一號

□

四

八

一

二

三

四

一上等  
三中等

五

六

七

八

九

（原朝臣  
正四位下  
石上朝臣  
毛利少弁  
從五位下  
大）

十

十一

十二

十三

十四

（原朝臣  
正四位下  
石上朝臣  
毛利少弁  
從五位下  
大）

十五

十六

十七

十八

十九

（原朝臣  
正四位下  
石上朝臣  
毛利少弁  
從五位下  
大）

二十

廿一

廿二

廿三

廿四

今授外少

廿五

廿六

廿七

廿八

廿九

091 11727六号

合一百冊八人七八八位

卅

卅一

卅二

卅三

卅四

一百六人无位

卅五

卅六

卅七

卅八

卅九

一百六人无位

卅十

卅一

卅二

卅三

卅四

一百六人无位

卅五

卅六

卅七

卅八

卅九

一百六人无位

卅十

卅一

卅二

卅三

卅四

一百六人无位

卅五

卅六

卅七

卅八

卅九

遷任藍子无位

四十

四一

四二

四三

四四

依仲麻呂支鑑除

四五

四六

四七

四八

四九

省符『景雲三年九月廿二日』

五十

五十一

五十二

五十三

五十四

正四位下  
石上朝臣  
毛利少弁  
從五位下  
大）

五十五

五十六

五十七

五十八

五十九

「

六十

六十一

六十二

六十三

六十四

原朝臣  
正四位下  
石上朝臣  
毛利少弁  
從五位下  
大）  
藤原朝臣  
正四位下  
石上朝臣  
毛利少弁  
從五位下  
大）  
中弁正五位  
中弁正五位  
中弁正五位  
中弁正五位  
同平城宮  
同平城宮  
同平城宮

六十五

六十六

六十七

六十八

六十九

## 9 関係文献

奈良國立文化財研究所『奈良國立文化財研究所年報一九六七』(一九六七年)

同『平城宮発掘調査出土木簡叢報』(一九六七年)

同『平城宮木簡四』(一九八六年)

(寺跡保伝)

# 彙報

## 第八回総会および研究集会

木簡学会第八回総会と研究集会は、一九八六年一二月六、七日の兩日にわたり奈良女子大大学会館、および文学部において、約二〇〇名の参加者を得て開催された。会場には平城宮跡、藤原京跡、大阪府柏原市安堂遺跡、大阪市道修町遺跡等出土の木簡が展示され、関心をよんだ。

### ◇一二月六日（土）（午後一時—五時）

#### 第八回総会（議長　皮尾俊哉氏）

最初に平野邦雄副会長の挨拶があり、会員が二八八名になり今後は会員数と会の運営とのバランスが考えられなければならくなつたこと、また委員については改選の時期を迎えてること、雑誌以外の会員へのサービスとして各地での木簡出土遺跡の見学会も企画したいとおもつていてことなどが述べられた。つづいて、議長に皮尾俊哉氏を選出して議事にはいった。

#### 会務・編集報告（佐藤宗諱氏）

会員数は、一三名の新入会員を迎えて、二二〇名になったが二

名の退会者があつたので現状は二一八名であること、また外国人会員については雑誌代と送料のみで会員扱いとすること、会誌八号の編集経過、会誌代金の据え置き等が報告され、承認された。

#### 会計報告（岩本次郎委員）

一九八五年度の会計報告が行なわれ、年度の収支についての説明があり、ひきつづいて開発監事から会計の執行が正當、適切に行なわれている旨報告があつて、異議なく承認された。

ひきつづき、委員、監事の改選が行なわれ、新委員、監事が選出された（一八三頁参照）。

#### 研究集会（司会　早川庄八氏）

##### 木簡と表記史

##### 土器墨書論—地方官衙の事例を巡って

種岡耕二

原秀三郎

種岡氏の報告は本誌に掲載することができた。原氏の報告は、土器墨書という用語およびその性格と分類とについての一般論を展開した上で、坂尻遺跡の事例をとりあげて具体的な報告がなされた。

#### 研究集会終了後、グリル友栄で懇親会がひらかれた。

#### 研究集会（司会　佐藤宗諱氏、青木和夫氏）

##### 一九八六年出土の木簡

##### 長岡京左京二条二坊六町出土の木簡について

寺崎保広  
清水みき

大阪市東区道修町出土の豊臣時代の木簡について 中尾芳治

一九八六年度平城宮跡出土の木簡 館野和己

寺崎報告は一九八六年に出土した木簡と八四年以前に出土した未報告の木簡を全国的に取り上げその概要を報告したものである。清水報告は、地子の荷札木簡に論点をしほって報告された。

また、中尾報告は、豊臣時代の荷札木簡についての報告で、脇坂

など大名の名前が見られることが注目をひいた。

それぞれの報告については、質疑討論が活発に行われ、総括討議で締めくられた。最後に直木委員から閉会の辞があり、参加者への謝辞が述べられた。

#### 委員会報告

◇一九八六年一二月六日(土) 於奈良国立文化財研究所

総会に先立って、会務・編集の状況、総会・研究集会の運営について検討が行なわれた。

◇一九八六年一二月六日(土) 於奈良女子大学

総会後新委員・監事によつて、一九八七年度の役員を互選した。

◇一九八七年六月一七日(水) 於奈良国立文化財研究所

新人会員の承認、一九八六年度の会計報告、木簡研究九号の編集計画、研究集会の内容の検討、十周年記念事業の計画についてなどが論議された。同日、会計監査もおこなわれた。

◇一九八七年一一月一一日(水) 於奈良国立文化財研究所

新入会員の承認、研究集会の内容の検討、八七年度前半の会計報告などが行なわれ、十周年記念事業として記念出版を行なうことが決った。

木簡学会役員

幹監		委員	
事事		副會長	
橋本	鶴野	平野	邦雄
義則	綾村	大庭	脩
	田中	青木	和夫
	和田	鬼頭	清明
	早川	松下	正司
	庄八	庄八	
寺崎	加藤	八木	原
	長山		秀三郎
	泰孝		梅山
	優	充	晴生
東野	榮原	吉田	町田
治之	永遠	佐藤	佐藤
		宗諱	章
			久

PROCEEDINGS OF JAPANESE SOCIETY  
FOR THE STUDY  
OF WOODEN DOCUMENTS

NO. 9 1987

CONTENTS

Forword .....	Minoru Tanaka.....	i
Wooden Tablets Excavated in 1986 .....	1	
Outline		
Explanatory Notes		
Nara Palace Site, Nara Prefecture; Kofukuji Temple Site, Nara Prefecture; Fujiwara Capital Site, Nara Prefecture; The Temple Site in Wada, Nara Prefecture; Tachibanadera Temple Site, Nara Prefecture; Remains of Magarikawa, Nara Prefecture; Nagaoka Capital Site(1), Kyoto Prefecture; Nagaoka Capital Site(2), Kyoto Prefecture; Nagaoka Capital Site(3), Kyoto Prefecture; Nagaoka Capital Site(4), Kyoto Prefecture; Remains of Kyoto Capital Western 2nd Ward on 3rd Street, Kyoto Prefecture; Remains of Kyoto Capital Western 1st Ward on 5th Street, Kyoto Prefecture; Remains of Kyoto Capital Western 2nd Ward on 8th Street, Kyoto Prefecture; Fushimijo Castle Site, Kyoto Prefecture; Osakajo Castle Site, Osaka Prefecture; Remains of Ando, Osaka Prefecture; Remains of Tsuda-Toppana, Osaka Prefecture; Remains of Kayafuri-A, Osaka Prefecture; Remains of Nyogamori, Hyogo Prefecture; Presumptive Remains of Tajima-Kokufu, Hyogo Prefecture; Remains of Hatsudayakata, Hyogo Prefecture; Remains of Fukudakataoka, Hyogo Prefecture; Kiyosu Castle Site(1), Aichi Prefecture; Kiyosu Castle Site(2), Aichi Prefecture; Remains of		

Igura, Shizuoka Prefecture; Remains of Tsuchihashi, Shizuoka Prefecture; Sunpu Castle Site, Shizuoka Prefecture; Tokyo University Campus Site, Tokyo Prefecture; Remains of Hamanogawa, Chiba Prefecture; Remains of Jinshojibo, Shiga Prefecture; Remains of Jorinji, Shiga Prefecture; Remains of Kosoji, Shiga Prefecture; Remains of Yoshiji-yakushido, Shiga Prefecture; Isawajo Caslte Site, Iwate Prefecture; Nejo Castle Site, Aomori Prefecture; Remains of Oishi 2, Yamagata Prefecture; Remains of Niiado, Yamagata Prefecture; Hotta Fort Site, Akita Prefecture; Remains of Tana, Fukui Prefecture; Remains of Sonbo, Fukui Prefecture; Remains of Tsuji, Toyama Prefecture; Remains of Toda River, Shimane Prefecture; Remains of Kusadosengencho, Hiroshima Prefecture; Remains of Suo-Kokufu, Yamaguchi Prefecture; Remains of Nakashimada, Tokushima Prefecture; Remains of Dazaifu, Fukuoka Prefecture; Remains of Isoda C, Fukuoka Prefecture; Remains of Yoshinogari, Saga Prefecture	
Wooden Tablets Excavated before 1977(9) .....	114
Nara Palace Site (32nd Add. Excavation)	
The History of the Application of Chiniese Character to Japanese Language and Wooden Tablets Recovered from Morinouchi Site .....	Koji Inaoka..... 119
The Reconstruction of SAKUSHO (冊書) Recovered from Linghusui (凌胡慰) in TUNHUANG (敦煌) .....	Osamu Oba..... 130
A Collection of Excavated "Urushi-Gami" (Paper Permeated with Japan) Documents .....	Sojun Sato, Yohinori Hashimoto..... 144
The Function of the Wooden Tablets Stored of SHOSOIN, Concernning to the Reports of Hidesaburo Hara .....	Haruyuki Tono..... 176
Memoire for the late TOSHIO KISHI, the Former President of MOKKAN GAKKAI.....	Kunio Hirano..... 180

*Published by*

JAPANESE SOCIETY

FOR THE STUDY OF WOODEN DOCUMENTS

一九八七年十一月二十日 印刷  
一九八七年十一月二十五日 発行

〒630  
奈良市二条町二丁目九番一号  
奈良国立文化財研究所

編集発行  
木 簡 学 会  
鬼 朋 清 明 気付  
会長 平野 邦雄

TEL (0743) 三四一三九三一  
振替口座 京都 ○一五二七

京都市下京区油小路仏光寺上ル

TEL (075) 三五一六〇三四  
眞 陽 社

ISSN 0912-2060

